

バルザック評伝

第一部

若き日のバルザック

金子 守

- 第一章 バルザックの少年時代 ——(本号)
- 第二章 屋根裏部屋のバルザック
- 第三章 バルザックとベルニー夫人
- 第四章 机上の実業家バルザック
- 第五章 バルザックと七月革命
- 第六章 バルザックとカストリー公爵夫人
- 第七章 バルザックとハンスカ伯爵夫人
(その一)
- 第八章 バルザックとハンスカ伯爵夫人
(その二)

第一章 バルザックの少年時代

オノレ・バルザックは1799年5月20日の午前11時にツールで生れた。われわれが周知の如く、此の年は、ナポレオンが政治の実権を掌握することに成功した年であった。すなわち、ブリュメール18日のクーデタによる。元老院はそれまでは遠征軍の一司令官にすぎなかったナポレオンを臨時執政に任命したからである。続いて、共和暦8年に制定された憲法により、彼は第1執政となり、独裁的権力を手中にした。あけて1800年には、ハンニバルの古事を踏襲して、ナポレオンはアルプスを越えてイタリアに侵入し、マレンゴでオーストリア軍と戦い、これを破って、国内の反ナポレオン分子を沈黙させた。すでにナポレ

オン自身が自覚していたと思われるが、彼の名誉はいうまでもなく戦勝にあった。だからこそスタール夫人は、否、夫人ばかりでなく当のナポレオンから形而上学者と呼ばれたイデオログの本音であったと思われるが、ナポレオンが戦いに負けた方がフランスのためと考えたと云われている。それゆえ、こうした激動期に生れたバルザックは、その少年時代をナポレオンが栄光への道を登る毎に成長したのであるから、ナポレオンがバルザックの人間形成に与えた影響は全的なものであり、文字通り三子の魂百までの格言そのものと云えよう。

バルザックの父ベルナル・フランソワは、ヌーゲリエの小さな村で1746年に生れているが、彼は、1716年に生れ1778年に亡くなった父ベルナル・バルサと、息子の彼が結婚する前年の1797年にこの世を去った母ジャンヌ・グラニエとのあいだに生れた長男である。それで、バルザックの父方の祖父母はラングドシアンであり、ツールとは関係がない。バルザックの祖父ベルナル・バルサは貧しい農夫で生涯を終ったが、世間の父親にありがちな自分が果せなかった立身出世の夢を息子たちにかねえさせるために、息子たちが実社会に出てより高い階段を登れるように努力し、バルザックの父となる長男のフランソワには黒服を着せようとした。つまり聖職に就かせようとしたのである。それでフランソワは読み書きができ、さらにラテン語さえ少しは読めるようになった。しかしながら、聖職者となるには元気すぎる性格であったことから司祭になることをあきらめたと伝えられる。そこで、彼はある期間家業である農業に従事していたが、ほどなくカセナックの公証人であったアルタール氏の秘書となり、氏の事務所では1759年から1765年まで働いていたが、20歳のときに息子バルザックの作中人物たちの如く、野心に燃える彼は上京する。生来名誉にあこがれる男で、家名を高めたかったのか、自分の代になってからバルッサ姓をかえてバルザックと名乗ったらしいが、その由来は、生え抜きのゴール人の子孫であることを自認し、先祖が外敵と戦ったことを家門の誇りとしていたことから、ゴールの騎士にバルザック・ダントラーグという名門があり、これが自分のバルザック家と同門であると勝手に解釈して、バルザック姓を名乗

ったと推測されている。さらに彼は次女ローランスが生まれたとき、出生届に際して、ド・バルザックと貴族の称号で署名している。

アンドレ・ビーは『バルザックの生涯』のなかで、バルザックが『セザール・ピロトー』で、父のこうした姿をわれわれ読者に伝えたことは疑いの余地がないと指摘している。それは第二章に読まれる。セザールがパリへやって来たときの様子である。

（その当時のセザールは鎧を打った靴に、半ズボン、青色の靴下、花模様のチョッキ、百姓風のうわ着、もののいい布で作った3枚の厚手のシャツ、それに旅行用の杖といったいでたちであった。たとえ彼の頭髪は教会の唱歌隊の子供がそうしているように刈られていたとは云え、ツーレーヌ地方びとに特有なしっかりした腰をもっていた。それにたとえ時として地方の人にありがちな怠惰なそぶりを見せはしたが、それは金を儲けたいという願望によっておぎなわれていた……）

作家が作品に自分の分身として作中主人公を登場させるばかりか、自分の近親者を作中人物として登場させる場面を描写することは度々眺められる事実であり、そこにはわれわれ読者には窺い知ることのできない創作上のなんらかの秘密が介在しているものと思われる。フロベールが『ボヴァリー夫人』の有名なラリヴィエール博士として、作家の医者である父親をしのんだことはよく知られている。また、スタンダールの『赤と黒』でその邸の主人が不在のとき、レナール夫人と子供たち、それにジュリアンが楽しんでいる場面に、突然、姿を見せた主人の存在が、その場の雰囲気をかえる。それはスタンダール少年の体験した現実の姿ではなかったのか。

1765年頃に上京したベルナール・フランソワは、パリで色々な職業に従事したあとで、確実な証拠がでてこないところから、今日では疑問視されているばかりか、彼の法螺とみなされているのが実状であるが、当人は枢密院の弁護士となったと主張している。ただ明白な資料もあって現在云えることは、1776年に審理部の長であったアルベール氏の秘書の資格で枢密院に入って、1794年4

月1日の枢密院の廃止までそのメンバーであったことである。パリ・コミューヌでは、1792年にコンセユ・ジェネラルのメンバーとして選ばれている。

やがて戦争が始まり、1795年にツールにある第2師団の兵站関係の仕事を任務とする主計官となった。50歳になったときには金銭的な余裕もでき、社会的にも重要な地位に就いていたけれども、それまでの彼はかなりの年齢にもかかわらず、女たらしで元気者と噂されていた。それで、その年になってもいわゆる世間並の所帯もっていなかったところから、世間の信用を結婚することで、つまり、家庭をきずくことで得たいと考えるようになったのか、1797年1月30日に自分の年より32歳も年下のパリの商家の出身であるサランビエ嬢と結婚式をあげることになる。バルザックの母となる新婦は、1778年10月22日生れだったから18歳だった。彼女は本名をアンヌ・シャルロット・サランビエと云い、その父はパリのダニエル・ドゥーメール銀行の役職者であったが、その部下に秘書課長になっていたベルナル・フランソワがいたのである。彼女はたいへん神経質で、少々空想的傾向の性格だったが、パリのブルジョワ家庭の躰けをきちんと身につけた娘だったと伝えられている。ところで、ツヴァイクは『バルザック』のなかで兩人の結婚に就いて、彼女の両親が、相手はかなり年をとっているにせよ、金銭の感覚に特別めぐまれているから堅実な配偶者とみなして娘を嫁がせたのであろうと推測している。彼女がバルザック家に持参した書物、従って、彼女の蔵書ということになるが、それらの書物のなかには一連の神秘家たちの名が読めた。すなわち、サン・マルタン、スヴェーデンボルグ、ヤーコップ・ベームなどであった。こうした家庭環境から、バルザックが神秘思想を信奉するようになったのは、これら神秘思想家の書物に親しんだ母親の感化をもらって受けたと従来云われていたが、実際はツール時代のバルザックがまだ少年であり、寄宿して中学時代を送ったことから、そうした母親の感化をこうむったとは考えられないと見た方が真実に近いと思われるのである。さらにバルザックはものごころついた頃からすでに母親の自分に向けている冷たい心を感じとっていた。たとえば、詳しくは後述するけれども、ヴ

ァンドーム校から、彼が母宛に出した手紙に読みとることができる如く、涙ぐましい努力をして、此の母のご機嫌とりをしたことがあったとしても、自分と母親との距離は他人以上にはなれている事実をはっきりと見抜いていた。子供であるバルザックは、此の母とどちらかが倒れるまで冷戦を続ける宿命にあることを感じていたのである。バルザックが生れつき無頓着なお人よしであった事実は、彼をよく識る人々のあいだでは周知の認識であっただけでも、その彼が許すことのできない人間として、この母親を考えなければならなかったのである。43歳になっていたバルザックが愛するハンスカ夫人に宛てた手紙にはわれわれが読むも恐ろしい告白が認められる。

（私の母がどんな女かご存じだったら…… 鬼のような女でもあり、怪物のような女でもあるのです。あのかわいそうなローランスと祖母を殺してから、いまや私の妹を殺しにかかっている 最中 です。いろんな理由で私を憎んでいます。生れない前から憎んでいたのです。……私とは云えば、すんでのことで母と縁切りをするところでした。それがほんとも知れませんが、しかし私はむしろ苦しみ続けるほうがいいと思います。これはどんなにしてもなおらない傷のようなものです。われわれは、母が気でも違ってるのではないかと思いました。そこで33年このかた母と知合いの医者にきいてみましたところ、医者のお答えはこうでした。「いや、間違いではありません、意地わるなんですよ。」……母は私のありとあらゆる禍のもとです。）

およそこの関係は事実であったろうが、しかしながら私にはハンスカ夫人宛に、此の手紙を執筆するバルザックの心理には、恋する者が相手の母性本能をくすぐる計算をしているように感じられるのである。すでに私は『スタンダール伝』を書いた際にも同じような印象を経験しているからである。というのも、スタンダールは愛するメチルドに自分が父親から、さらに心の底からかわいがり、信頼していた妹からさえこうむった苦悩を告白して、彼女の母性本能を明らかにめざめさせようとしたことがあった。もっとも賢明なメチルドはその手にのらなかつた。

その後、ベルナール・フランソワは知事であるポムルール男爵の推選で税務署長に任命されたのであるが、彼は男爵とはパリで面識を持ったようである。此の一家には自分が世話になったばかりでなく、後年、息子バルザックが『ふくろう党』の取材旅行のため、世代のかわっていた男爵邸でながいあいだ逗留することになる。1803年になると、ベルナール・フランソワはツールのオスピス・ジェネラルの管理人となり、ついでナポレオンによって市の助役に任命された。それで、バルザックの一家はツールで1814年まで居住する。

此のツールでバルザック家の子供はみな生れている。1798年5月20日に第1子のルイ・ダニエルが生まれたが、非常に短命で僅か1カ月後の6月21日死亡している。1799年5月20日の午前11時に第2子バルザックが生れ、1800年9月29日にロールが生れ、続いてローランスが1802年4月18日に生れた。それにもう1人、1807年にアンリ・フランソワが生れたが、ベルナール・フランソワの実子ではないと云われている。当世流に云えばバルザックの母のよろめきから生れた不義の子なのである。そして、よろめきの相手は、ジャン・ド・マルゴンとみなされている。後年、バルザックはこの弟アンリのことをハンスカ夫人に自分の異父弟であるとうちあけているが、アンリはバルザックとちがって母からたいへん愛されて育ったのにもかかわらず、成人すると手のつけられない遊蕩をするようになったという。

バルザックの父はこうした簡単な人物像からも想像される如く社会的にはたいへんに多忙な人物であったことがわかるのであるが、彼はどちらかという和自己中心的な男で、ながくこの世に生存したいものと異常なくらい生命に執着していた。それで少しでも身体の調子が悪いと細心の注意を払って日常をすごし、暇がありさえすれば、長命の問題を研究していたと伝えられている。そうした反面、職業では活動的であったばかりでなく、作家の真似事すらしている。というのは、1808年から1832年までにナポレオンや、アンリ4世などの運命に就いて4冊ばかり出版していることが知られているからである。それに彼の生きた時代がそうさせたと思われるが、折衷主義であったせいも、博学な彼は

バイブルから中国文化にいたるまで通じていて、家庭の団欒時には、蘊蓄をかたむけたともいう。バルザックはこうした父親から感化を受けたであろうし、知らず知らずのうちに耳学問となり、彼の教養を培っていったことであろう。一方、母親は天啓論に漠然と影響されていたせいで、たとえ当時は信仰にあつくなかったとしても、教会に祭礼があるときは子供たちを連れていったというから、やはりなんらかの影響をバルザックに与えていると云えよう。もっともこの母は、子供たちに母親らしい愛情をこめて接していたとは考えられない。こうした母子関係に就いてはバルザックの母にも云い分はあろう。先述した如く、第1子のルイ・ダニエルが僅か1カ月に死亡した事実が、彼女にとって他人には窺い知ることのできない心痛となり、子供を自分の手で育てる自信を喪失させたと云えるのかも知れない。ともあれ、バルザックとその下のロールとは生れるとすぐ自分の手許からはなして、サン・シール・シュール・ロワールに住むある憲兵の妻女に乳母になって貰った。ときにバルザックは4歳だった。此の村は風光明媚で知られ、バルザックは後年この村を作品の舞台に使用している。こうした事情からバルザックは自分と一緒に家庭の外に出された妹ロールをたいへんかわいがるようになるが、兄と妹の肉身の情愛は、2人の場合相互的なもので、ロールもそうした兄バルザックの妹思いの気持ちに感謝している。後年、ロールは結婚してからも兄バルザックの世話をなにかとみている。バルザックの母は2児を乳母にまかせたせいか、ローランスを不義の子アソリが生れるまではたいへんかわいがったようである。

さて少し話を戻してみよう。バルザックが3歳になった1803年の春、一家は始めて母方の祖父母に会うためパリへ皆で行った。孫の顔を見て気がゆるんだのか、日ならずして祖父が亡くなり、祖母は娘の嫁ぎ先であるヴィルパリジのバルザック家で余生を暮らすため住みなれたパリからやって来て同居することになったのであるが、バルザックの父とうまがあわず、夫の遺産で家を買ひ、農場も手に入れて別れて住むことになる。もっともバルザックはこの祖母をいびり殺したのは母だと云っているから、実の娘にうとまれたのかも知れない。

バルザックは4歳のとき、読み書きを覚え始めたと伝えられているのであるが、それは、1804年に、彼が日本流にいうなら幼稚園に相当するルゲ・ド・ツールに通いの生徒として入学したからで、幼児である彼にもかなり居心地の悪い学校という印象が残った程度のものであったらしいが、1807年にはそこを去り、ヴァンドームにあるオラトリア会の中学校に彼は寄宿生として入学した。此の年、バルザックは8歳になっていたが、すでに6歳のとき、彼は初恋を体験しているという。その相手は、ジョアナ・マルリアニと呼ばれたスペインの少女であった。バルザックは彼女の兄弟と友人であったところから子供心に異国の少女に淡い恋心を感じたのであろう。彼が入学した寄宿学院はいわゆる伝統のある有名校であったが、学校の規律も厳しいことで知られていた。学校の入学者名簿にはバルザックに就いて次の如く記入されている。

(460号、オノレ・バルザック、8歳で、それ程目立つことはないがあばたがあった。性格は血の気が多く、短気であり、高熱にかかりやすかった。1807年6月2日寄宿生として入学。連絡先、父バルザック氏ツール居住。1813年4月22日退校。)

此のヴァンドーム校は、1623年に創立されたものであるが、先述した如く、オラトワール教団の経営するもので、1789年の大革命以前までは、その教育方針がジェジュイットの教育と対立することで有名であった。バルザックの入学時には16人の教師がいて、生徒たちの教育にあっていたが、その1人にルフェヴルもいたと云われている。彼は後年パリに出て、詩人として劇作家として有名になった。その彼がバルザックに文学に対する目を開いたのかも知れないと伝えられている。というのは、数千冊の書物がある図書室にバルザックが自由に入出入りするのを咎めもしなかったという。

ところで、バルザックがこの学院で勉強したことから、短絡的に彼が王政主義の思想を信奉するようになった遠因と考える見解は、今日では誤りであるとみなされている。なるほど、われわれがすでに見た如く、此の学院の規則はたいへん厳しく、先生を生徒たちに〈神父さま〉と呼ばせるが如き象徴的保守性

が認められたけれども、こうした保守性は表面的なもので、その実体はむしろ正反対であった事実われわれは注目する必要がある。

少年バルザックが学院長ジャン・フィリベール・デセーニュを始めとする学院の教師たちが、どのような人物たちであったかは知るよしはなかったであろうが、学院の教育方針を決定する院長が、いかなる人物であるかを明らかにすることは無駄ではあるまい。彼は大革命に感激し、共和主義を信奉するイデオログの弟子であったが、エコール・ノルマルが創設されると、ヴァンドーム地区から研修に派遣され、当時の有名なラグランジュ・モンジュ・ベルトレに師事して、数学や化学を研究し、1795年に中央学校となった旧学院の近くに私立の塾を開いたのであるが、1802年にイデオログを嫌悪するナポレオンによって中央学校が廃止され、もとの学院に戻ると、彼は再び学院長に就任した。彼は学院の指導者であると同時に自らは物理学や生理学を研究し、科学雑誌に研究成果を発表する熱心な学究であった。

しかしながら、バルザックが在学した1807年から1813年にはすでに学院に革命的な雰囲気があったとは考えられない時代である。自らも学生時代にイデオログの教育を受けたことのあるナポレオンにしてみれば、自己の野心を達成するためには大きな障害になるイデオログを教育理念にされてはかなわないので、1808年の帝国教育団の組織に関する勅令を公布して、すべての学校はカトリック（ナポレオンはカトリックをフランスの国教とすることで、ときの法王と協約を結び、皇帝の地位を認めさせた。）の掟を守り、ナポレオンのすべてに忠誠をつくすべしと布告している。そこで、バルザックもすでに生徒となっていたヴァンドーム学院も、此の勅令に従った教育方針をとっていた筈であるが、教師たちがそうした勅令による教育方針にそって心から生徒たちの教育にあたったとは考えられていない。革命が人々にひろめた無信仰と合理主義の精神は、勅令という紙切れで払拭できるものではあるまい。そうした精神はすでに青年たちのあいだにあっては教師といえども盲目になり、ナポレオンの戦勝に熱狂する。まして一般大衆や生徒たちが、ナポレオン崇拜に無条件に走ると

しても不思議ではない、バルザックもこの時期に皇帝を崇拜することになる。

1809年5月1日にヴァンドームから生れて始めて母宛の手紙を書いた。以下に引用する如く、たいそう勿体振った大袈裟な表現であるが、後年、バルザック自身がこの手紙の件を回想してか、フェリックス・ド・ヴァンドネスに次の如く告白させている。

（私は両親を学校に呼びよせるために、感情にみちた、大袈裟な表現をした手紙を幾つも送りました。）

バルザックは手紙を（私の親愛なるお母さん）と書きだしている。

（私が粗末なベットにいたことで、お父さんが悲しまれたと思います。賞状を得たとお父さんにおっしゃって慰めてあげて下さい。私はハンカチで自分の歯をこすことを忘れません。きちんとノートをとるための控え帳を1冊作りました。それで良い成績をとっております。このようにして私はお母さんに気に入られるつもりです。心からお母さんに接吻し、そして、家中の人たちや私の識っている人々をも。ここには、賞を得た人々やツール出身の人々の名前があるのです。すなわち、説明板があります。私はそればかり思いだしております。

オノレ・バルザック

あなたの従順にして心優しい息子より）

お母さんと呼びかけるバルザックの気持を知ってか知らずか、彼の母は自分を慕う息子の心情あふれる告白にも恰も継母の如く冷たく反応したばかりか、手紙の文体が体裁をなしていないと皮肉たっぷりの叱言に終始した返事をバルザックに送っただけであったという。家庭をはなれて、寄宿生活の孤独に泣く彼の淋しさを慰める母親らしい言葉は、どこにも書かれていなかった。それどころか、息子がヴァンドーム校に在学していた6年間に、此の母は僅か2度しか会いに来なかったと伝えられている。従って、『谷間の百合』の主人公であるフェリックス・ド・ヴァンドネスの絶望的な叫びは、バルザック自身のそうした姿の投影であったとみなすバルザック研究者の指摘は、正鵠を射ていると

われわれも考える。それで、作家がフェリックスになりきって自己の少年時代を回想しているとすれば、ヴァンドーム時代の自我像をどのようにバルザックが彫刻しているのか、われわれは『谷間の百合』のなかの少年をしばらく眺めたいと思う。

（私がいつも暗い顔をし、憎まれ、孤独にしているのを見て、家の人々が私の性質をとりちがえて根性まがりだと思っていたのを、教師もそのまま受け入れました。読み書きできるようになると、すぐ母は私をポン・ル・ヴォワに送りました。そこにはオラトワール派が経営する中学があり、……私はそこに入り、寄宿舎で暮らすようになるのですが、両親からこづかいとして月3フランしか貰っていませんでしたので、用意しなければならなかった学用品の類、ペン先、ナイフ、定規、インクなどを買うのに全部つかっても足りないくらいでした。それで学校で遊ぶ竹馬とか綱とかは買えなかったのです。そうした遊びに仲間入りするためには、金持の子供とか組の餓鬼大将にこびへつらわねばならなかった。ところがそうした行為は私にはむかむかするほどいやでした。それで1人淋しく夢にふけり、毎月図書係がわたしてくれるたくさんの本を読んできましたが、心の奥底には孤独から生ずる多くの苦しみがうずまいており、どんなにかずかずの心の悩みがこのかえり見られなかった生活から生じたことでしょう。そうした一つの場面を語ってみましょうか、私が外国語の訳と作文で第1等賞を得たとき、私の傷つきやすく、優しい心が何を感じたか想像できましょうか。授与式が始まり、拍手と楽隊のとどろくなかを壇上に進んで賞状を受けとったのですが、場内は級友の両親たちでみちあふれていたのに、私には祝ってくれる父も母も式場に来ていなかったのです。こういうときの慣例に従って授与者に接吻するかわりに、私はその胸にしがみついて、涙に泣きくれたのでした……）

このような中学生活の描写から判断すると、バルザックが現実にヴァンドームで送った中学生活とあまり差のないものであったことは肯定できるのではなからうか。

さらにヴァンドーム時代のバルザック少年の姿は、此のフェリックスの他にルイ・ランベールにも認められることは明らかであるが、われわれにはフェリックスが中学時代の初期バルザックの姿を主に投影しているように思える。それに対してルイ・ランベールの方はより高学年に進んだバルザックの内面的な姿を主に投影しているのではなからうか。勿論、ルイ・ランベールの体験にも初期のそれがある。先述した如く、バルザックは妹ロールと共に風光明媚で知られたサン・シール・シュール・ロワールで暮らしたが、その分身のルイ・ランベールを、作家は中学に入学する前に田舎で太陽の下で暮らしたと描写する。かくてバルザックは自己の姿をルイ・ランベールに投影する。

それで壁で囲まれた教室に80人もつめこまれて生活を送ることが、ルイ・ランベールにとってはたいへんな苦痛になる。そればかりか、教室の空気が、食事の残り物とか、生徒たちの着ているものとか、その持物とか、ときには祭日のために殺してあった鳩とかで、異常な臭気になっていた。唯一の救いは、教室の外を眺めることだった。そこには田舎で親しんだ樹木の緑と空の雲とがあった。それで先生の云うことをまったく聞いていないルイ・ランベールのノートはなにも書かれていない。かくて彼は神父からも睨まれている要注意の生徒となり、神父の手にする鞭は、彼を打つためにあるようなものとなる。神父が「君は怠けているね」と叱るとき、別世界から現実に戻される。その別世界ではルイ・ランベールは休むことなく頭を働かして瞑想にふけていたから、自分が怠けていると注意されてもその意識はなかった。彼は返事の代りに軽蔑のこもった眼差でやおら神父をみつめるだけだった。その態度がまた鞭の数を増すことになった。先生の誰1人この少年の住んでいる世界を覗いたものはいなかった。ルイ・ランベールはラテン語の不出来な生徒としか評価して貰えなかった。バルザックが後年になって作品で語る如く天才たる者はどこか並でないにかを持っている筈なのに誰も気づかなかった。もっとも本人すら自己の天分を自覚せず、生涯を終る者もいよう。バルザックにも一生の道程には、横道にそれるそうした危機があった筈である。中学の低学年の頃は瞑想のなか

で、実家を離れて生活する子供なら誰でもそうするように田舎での体験、父母のこと、2人の妹のこと、生れたばかりの弟のことなどを漠然と追想するだけだったかも知れないが、それらの映像の対象があきられてくると、それらにかわる新しい映像の対象が必要になる。ルイ・ランペールがこうした人間の脳細胞の仕組を意識したわけではなからうが、フェリックスも回想している如く、教室の仲間と殆んど友人を持つことのなかった彼は、こちらからはなにも気を使う必要のない相手である書物という友人を持つようになる。神父たちから叱られる恐怖も、授業中に覚える屈辱も、此の友人と対面する瞬間から消えてしまう。つまり、ルイ・ランペールの別世界とは、此の友人との対話であった。こうした精神の交流を作家バルザックは『ルイ・ランペール』のなかで、次の如く描写している。

（われわれが図書館から借用してきて、それによって生命を頭脳のうちに蓄えていた本というものがなかったら、此の生活様式によってわれわれはすっかり馬鹿になっていたことであろう。）

それで本を読みたい願望は、ルイ・ランペールにとって恰も幾日も一切れの食物すら口に入れていない飢を覚えている者の食物にいただく空腹状態と同じ激しさだったのである。だから本の種類を選択するゆとりはなかったのも、図書館から借り出す本は極端に云えばなんでもよかった。しかし、こうした乱読はいつしかルイ・ランペールの記憶力を培うと同時に本に書かれている内容をたちどころに理解する天才的直観力をも身につけさせたと言えよう。それでバルザックはルイ・ランペールの頭脳でおこっている奇蹟を次の如く分析している。

（彼は読みながら文意を汲みとってゆくことに不思議な才能を示すようになった。彼の眼は一時に7、8行を見、彼の精神は眼と同じ速さでその意味を味わう。時には文章中の唯の一語のみでその文章の真意を掴むことすらあった。彼の記憶力もまた驚くべきほどであり、読書中に得た知識も思索や会話中にひらめいた知識もみな正確に憶えているのであった。場所についても、名前についても、言葉についても、物や姿についても、あらゆることを記憶しているの

だった。彼はまた単に書物を自由に想い出すばかりでなく、彼がその事物を心の中に再び見るのだった。此の力はなお理解という捉え難い働きにまでも及んでいた云々)

さらにバルザックはルイ・ランベールが記憶力をたどれば、彼の過去から現在にいたる全生活史と全精神史を想い出し、かつそれを明瞭な形で、いわば心像として、自己のキャンバスである脳内の映写幕に描くことができるとさえ断言する。バルザックの人間ばなれした恐るべき告白と云えようが、ルイ・ランベールは、従って少年バルザックはそうした心像を自由に組立てる遊び、つまり瞑想に耽っていた。それで、フェリックスやルイ・ランベールの回想にあるように孤独感から生ずる淋しさをまぎらすために、バルザックは本の虫になり、暇さえあれば読書と瞑想とに耽っていたが、それでも淋しきから生ずる心の病気はやがて形をとって身体にもその徴候を見せるようになった。あれだけ好きだった書物すら億劫から手にとることはいつしかなくなっていた。そのかわり夜になると、あるときは窓から、またあるときは、戸外でただぼんやりと星空を眺めているバルザック少年の姿が見られるようになった。1813年のこと、14歳になったバルザックは奇妙な発作にみまわれるようになり、そのせいか日ごとに痩せてしまい、蒼白い顔になり、やがて高い熱をだし、一種のノイローゼによる昏睡状態に落ちいり、倒れてしまった。バルザックの妹ロール・シュルヴィルはその頃の兄の様子を覚えていて、次の如く回想している。

(兄は眼を開けたままねむっているあの夢遊病者にそっくりでした。わたくしたちが兄に話しかける大部分の質問を聞いていなかったのです。兄にこう尋ねるときのみ、(あなたはなにを考えているのですか、あなたはどこにいるのですか、) 彼は答えられるだけでした。)

このような夢遊病者に似たノイローゼにかかったバルザックは、先述したヴァンドーム校の名簿に記されていた如く、1813年の4月22日に両親に引きとられて自宅のあるツールに帰った。ヴァンドームにおける窮屈な寄宿生活から解放され、ようやく自由を取り戻したバルザックはやがて徐々に元気になり、蒼

白かった顔色も日一日とよくなり、健康を回復することができた。

此の時代はバルザック少年ばかりか、フランス青少年たちは英雄ナポレオンの連戦連勝にどんなにか期待と野心を刺戟され続けたことであろう。なにしろ一兵卒が將軍になる激動の時代だった。しかし、バルザックが厄介な病気に苦しんでいるあいだにフランスの運命は大きく変化していた。前年の1812年にナポレオンはフランスの支配から免れようとするロシアに対して、仏軍約20万と同盟軍約50万から編成されている大軍隊でロシアを攻めた。ヴィルナ、スモレンスクを通過して、9月14日にモスクヴァに入城したが、ロシア軍は焦土戦術をとって、後方に撤退して降伏せず、ナポレオンは食糧の不足やロシアの冬をおそれて10月に入ると帰国の途につかざるをえなかったのであるが、トルストイの『戦争と平和』がわれわれにそうした場面を彷彿とさせている如く、途中で農民ゲリラや、カザーク騎兵の待伏や奇襲にさらされながら、あげくは50万以上の兵力を雪原で失い、目を覆うばかりの敗走を続けねばならなかった。

これは余談であるが、後年になって周知の如く、バルザックと邂逅する運命にあるスタンダールも、この遠征軍の一員であったので彼が本国の知人たちに投函した書簡を読んでみるとまさに上述の通りの証言をしている。

ともあれ、ナポレオンは部下の敗残兵を残して急遽本国に帰ったが、というのも本国からマレー将軍が叛逆したとの報告をうけとっていたからでもある。翌年になると、プロイセンはナポレオンの敗戦を契機にロシアと同盟し、フランスに戦いをしかけた。同盟軍は春から夏にかけてドレスデンなどで敗れはしたが、オーストリア、スウェーデンが同盟軍に味方して参戦するようになり、遂に不敗を誇ったナポレオンを同盟軍はライプツィヒで10月16日から18日にかけて撃破し、ライン河を越えてフランス領内に進攻した。同盟国側から自然を国境とする条件で、和平の提案がなされたが、ナポレオンはこれを拒絶して抗戦を続けたけれども、遂に1814年3月31日パリは占領されて、4月11日にナポレオンは同盟国に対して無条件で退位することを認めざるをえなかった。1カ月後にはエルバ島ゆきのキップをわたされることになる。

バルザックがようやく生氣を取り戻したとき、彼の崇拜する皇帝はこのように没落の道をたどっていた。息子がすっかり元気になった姿を眺めた両親は、彼が一時中断していた学業を続けさせる決心をした。バルザックの父は彼を1814年7月にコレージュ・ド・ツールに入学させることにした。ただし、両親はヴァンドーム時代の息子の寄宿生活に懲りていたから、バルザックを自宅から通学させることにした。なにが原因でか、われわれにも判然としていないけれども、彼はその学校で第3学年を2回やっているという。多分、ヴァンドーム時代の不勉強がわざわざしたのであろうと臆測される。しかし、それでもバルザックは賞を得ていて、その賞状は百合の装飾があったが、そのことは時代がすでに王政復古下にあったことを意味しているのである。

王政復古とは、1814年の5月に列国による大革命前のブルボン朝をフランス国王に復位せしめ、その結果、ルイ18世が王位を継承して新国王となり、新憲法を制定したことをさしているのであるが、その社会的背景はイギリスで始まった産業革命が、フランスでは大革命を経て一段と促進され、資本の蓄積が開始された。また、一方では革命に際しても完全に崩壊することのなかった封建残存勢力が、王政復古の機会を狙い続けていたのであり、そうした彼等に絶好のチャンスを与えたのが、ナポレオンの失脚とウィーン会議とであった。それで、王政復古下の政治は、土地貴族、僧侶、大商業資本家たちによる寡頭専制であった。勿論、その反動政策の推進者は、土地貴族であり、かつてのジャコバンの土地改革を大革命前に逆行させようとしていた。従って、このような政策は進行していた産業の発達を阻止する方向に作用するものであったが、イギリス資本主義と対立するフランス資本主義の利害を政府も等閑視するわけにはいかなかった。それでフランス資本主義の発展は、此の時代に加速され、産業革命を達成する段階をむかえることになる。社会的にはあらたに産業資本家層が形成され、反動体制派にとってもあなどりがたい勢力を持ち、必然的に政治の実権が、復古王朝の支柱であった土地貴族の手中から産業資本家層の手中に移行する。具体的には、資本主義が着実な地盤をきずくに従って政府に対する産

業資本家層の要求も強くなり、政府の政策もこれと妥協せざるをえなくなる。

まさにこれはスタンダールが『赤と黒』でわれわれに観察させてくれたところのものである。すなわち、彼はフランスという国家をヴェリエールという小さな町に縮小して、貴族の代表たるレナル町長一派と、それに対立する産業資本家たる自由党とのやりとりを見事に描写している。

さらに、産業革命の進展とともに勢力を増大してゆく労働者たちは、機械の発明進歩とともに生活をたえがたくさせられるほどに劣悪化され、復古王朝の無為無策と弾圧に激しく反抗する。こうした社会にバルザックは少年期の後半から青年期を送ることになるのである。

さて、常勝の英雄ナポレオンが戦鬪で破れた跋扈な事実は、バルザック少年にとっても、他のフランスの全青少年たちにとっても、なかなか信じられなかったことであり、バルザックも幾度か己の頬をつねってみたことであろう。大人たちには明日の生活があり、明日を家族とともに生きなければならない。

これも余談になるが、スタンダールはこの混乱した戦後の世相を眺めて、人は大きい奴も小さい奴も職を求めて奔走していると嘲笑していたけれども、スタンダール自身が、われわれが周知の如く、明日を生きるためには人々と同じく職探しをしなければならなかったので右往左往していた。

従って、敗戦の衝撃は、少年たちほど純粋に受けとめるものであり、少年バルザックもどんな堅固な巨木もいつかは倒れる宿命にあることを、身を以て体験したことであろう。けれども、ナポレオンが、ワーテルローで敗れ、セントヘレナに流されることになろうとも、彼の栄光は強く少年たちに影響する。偉人になること、それが男の人生だ。それ以外の生き方がどこにあらう。そこでバルザックは誰にも遠慮しなくてすむ場合、例えば、2人の妹たちを前にして自己の信念を披瀝したものである。

（あんたたちは、いつの日か、この兄オノレが偉人の1人として話されるのを知るだろうね。きっと、きっと……）

妹たちは幾度も同じセリフを兄オノレから聞かされているので、道化役者の

ように少しおどけて答える。彼女たちの口にするセリフもきまっている。

《偉大なオノレ・バルザックに最敬礼。》

そして3人は顔を見あわせて笑い、此の場は幕となる。

バルザックは妹たちには自分が思っていることを、このように素直にうちあけるのだが、これが母の前だったら、若しこんな言葉をうっかり口にしようものなら、直ちに子供心にもぞっとする冷笑が、きつとはねかえってきたことだろう。数十年後、われわれはにんじんと渾名された少年が、此の役をやっているのを知っているくらいだ。バルザックの母の口にするセリフはこうだ。

《オノレ、そんな大言壮語するものじゃないよ、敵な人間になれないからね。》

そうだ、彼は母から1,2度、すでにそうした叱言を聞かされたことがある。それはバルザックがヴァンドーム校から退学した頃の話で、彼の母は、医者から息子さんをできるだけ戸外にだして、新鮮な大気を吸わせることですと忠告されてもいたので、彼を娘たちと一緒に少しはなれたロワール河畔まで散歩につれていったことがあった。それは、まだ、ナポレオンが同盟軍をリュッツェン、パウツェンやドレスデンで撃破していた頃である。ナポレオンの勝利に刺戟されたのか、バルザックはでかいことを口にし、母から厳しい叱言を頂戴する破目になったことがあったのである。

ドゥメール氏の推選が利いて、バルザックの父は新政府に登用されることになり、パリの第1軍団に対する食糧補給の責任者に任命された。そこで、バルザックはコレージュ・ド・ツールを9月に去って、パリのタンブル街の40番地に家族とともに住むことになる。しかし、しばらくするとバルザックの両親は息子を塾に入れることにした。

今度、彼が塾生となったのは、ルピイトル寄宿塾である。そして、ここから彼はシャルルマーニュ中学に通学することになった。塾長のルピイトル氏は、王政主義者で、大革命の激動期には、マリー・アントワネットを救助する策謀に参加したともいう。作家バルザックは、後年、『セザール・ピロトー』のなかで、ルピイトル氏のこの体験をセザールのエピソードとして使用している。

此の塾の教育方針というものは、王政主義とカトリックから成立していたと伝えられている。此の時期のバルザックの学業はとりたてていうほどの出来ではなかったらしい。つまり、彼の成績はむらがあり、ラテン語はたいへん不得意であったが、フランス語の作文は学校当局がその優秀さを認めたくらい出来たと云われている。

次に述べることは、モーリス・バルデシュも信憑性がうすいとみなしていることであるが、1490年にツールで創立された文学会であるジュ・フロオロが、1815年8月13日に主催したコンクールにバルザックが応募したというのである。

いずれにしても、バルザックが生涯始めて資料として残る文学上のなにかを執筆したのもこの時期であるとみられているのである。そのなにかとは『ファルチュヌ』と題された原稿で、これは1836年に『セラフィタ』の原稿と一緒に、バルザックがハンスカ夫人に送ったもので、その原稿の表紙に彼自身が、鉛筆で執筆した日付を1816年と書きこんでいる。ただし、此の『ファルチュヌ』というのは、『ステニ』の執筆後に書かれた同題のものとはまったく別物であり、バルザック自身が子供の原稿と呼んでいるもので、書体も子供っぽいですが、その梗概は次のようなものである。

ある平和な小さな谷に慰安をもたらす神秘的な人物が姿を見せる。一方、『セラフィタ』の女主人公のようなミンナという若い娘が、此の土地に住んでいて、彼女は人々から見捨てられ、癩病に苦しむ十字軍兵士を世話している。かくてこの娘と神秘的な人物、すなわち、天使との出逢いをわれわれ読者は期待するのであるが、第1のノートはここで突然中断されてしまっている。そして、7年後の1823年という日付のある原稿が、ミンナを天使に数えている。なお、バルザックは先のハンスカ夫人宛の手紙に偶然から『セラフィタ』の主題に就いて、私が18歳か20歳のときに執筆した体裁のとれていない試稿を見つけましたと、此の『ファルチュヌ』に就いて加筆している。

それでこの時期の目的のないバルザックの生活態度が原因なのか、家族と彼

との関係ははかばかしくなかった。しかし、それでも彼は父の期待にこたえて、1816年11月4日に法学部に登録することが出来たが、バルザックは自分の生活費をアルバイトでかせぐことになり、その仕事は代訴人のところで謄本作りをすることであった。こうして彼は地方の若者の憧憬であるはなやかな花の都で暮らしながらも、ソルボンヌと代訴人とのあいだをもっぱら往復するだけのたいへん真面目な生活ぶりであった。此の青春時代の自分の姿を回想して、バルザックは『あら皮』の主人公ラフェエルに次の如く語らせている。

（私が高等学校を卒業したとき、……おやじは私にきびしいしつけをしようとして、自分の書斎の隣りの部屋に私を住ませた。夜は9時半に寝て、朝は5時に起きた。おやじは、法律の勉強に身を入れさせようとした。私は学校と代訴人の家と、双方かけもちでかよったものだ。だが、私の行動や仕事には、時間的、空間的な掟がきわめてきびしくあてはめられていて、そのうえおやじが晩飯を食いながら、恐ろしく厳格な出納報告をもとめたものだった……）

ともあれ、代訴人のところで仕事をしていたことが一つの彼の履歴となつて、1818年に今度は公証人パッセ氏のところで書生となるが、此の人はバルザックの家の隣人であり、友人でもあった。バルザックの両親は隣人の生活ぶりを見て、こうした表現はバルザック小説にしばしば読まれるところであるが、息子が公証人となることを切望するようになった。公証人は実入りもよく、社会的にも立派な地位をしめる職業である。だが、肝心のバルザックは家の者の期待に反して、公証人となることに拒絶反応を示すようになる。彼はパッセ氏のもとで公証人となるための勉強をする筈だったが、真面目に勉強をせず、暇がありさえすれば、リール・アダムへでかけていたという。そこにはレイ・フィリップ・ド・ヴィレル・ラ・フェという老人がいたが、彼はバルザック家の知人であり、かつては朝廷に出入りしたことのある俗僧で、この人物の身边にただよう雰囲気は、なにからななにまでこれ18世紀であった。実社会へ足を一步踏み入れたバルザックにとって、人生の先輩である老人の話がよほど面白かったのか、彼にすっかり魂を奪われてしまったとみえる。それで、1817年

頃、彼は老人を頻繁に訪問していた。また、此の時期、彼はソルボンヌでは、法学部の講義に出席するよりも、ギゾー、ヴィルマン、ヴィクトール・クーザンなどの講義に出席したりしていたとみられ、とりわけ、後者の神秘主義がバルザックに影響しているのが認められる。

ところで、『あら皮』の主人公ラファエルは、喜劇のほかに『意識論』を執筆したと屋根裏の青春を追憶しているが、それは、作中主人公に作家の分身性が云々されているところから、まぎれもなくバルザック自身の追憶でもあろう。彼は読書などから得た知識を哲学と宗教に就いての覚書のなかに記入し続けて、1818年に〈魂の不滅性に就いての覚書〉としてまとめている。

また、此の年、彼の父親は自ら退職したが、それというのも翌年の4月1日には職を去らざるをえなくなると見通しをつけたためであると伝えられている。さらに、此の年は彼にとっては恰も厄年の如き観があった。ドゥーメール銀行の決算で大損害をこうむる事態がおきてしまったのである。それで一家は出費のかさむパリでの生活を断念することになり、地方に移住する決心をした際、バルザックの母方の親類を頼ることにしたが、此の親類はセヌ・エ・マルヌの小村であるヴィルパリジに貸家を所有していた。そこで一家はその村へゆくことになったけれども、一家のなかで2人の子供がパリに留まることになる。というのもアンリが寄宿学校に在籍していた関係でそのまま残り、バルザックもパリを離れたくないと云いだしたからである。彼は作家になろうとひそかに決心していて、首都に住むのがその職業には最も好都合な場所に思えたのである。

とにかく、バルザックが作家になりたいと両親に切出したとき、暮らしぶりの派手な隣人の如く、息子オノレが公証人になるものと信じていた両親にとっては、バルザックの言葉は晴天の霹靂であった。両親はなんとかして息子オノレの決心をひるがえさせようとして、作家として成功することの困難さや、それだけで飯を食べてゆくことは絶対と云っていい程、不可能などと説得してみたものの、息子が頑としてきき入れないのを悟らねばならなかった。バルザ

ックの両親はやむなく条件つきで息子の野心をかなえることにしたが、その条件とは2年間の猶予を与えるから、その期間内に作家として世間に通用する作品がものにできたら、彼の願望を認めてもよいというものだった。バルザックは晴れてパリに残留することになり、安下宿を捜すことになるのだが、彼がやっとみつけたのは屋根裏部屋であった。

(続く)